

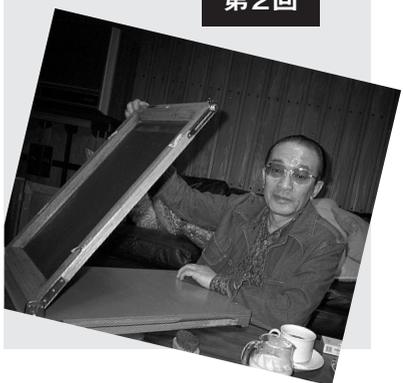


最後の映画俳優 佐藤慶のいた時代

猫とガリ版

第2回

ルポライター
鈴木義昭



大作『人間の条件』で俳優デビュー

慶さんは、俳優座の仲間だった仲代達矢が主演した五味川純平原作の戦争大作『人間の条件』で映画俳優としてデビューする。

小林正樹監督の『人間の条件』は、大陸での戦争の実態を全く知らされていなかった庶民にとっては、衝撃的な映画だった。戦後、戦争の本当の姿が描かれた作品として大ヒットした一本だ。全六部作のシリーズは、毎年終戦記念日の時期などを中心に長くくりかえし上映された。慶さんは第三部からの登場で、愛する

は、体重が三十九キロしかなかったのだ。ところが、その痩せこけた身体と暗い感じの表情が役柄にピッタリだと監督が踏んだのである。

それまでも、舞台はもちろんだが、放送開始まもないテレビなどでは仕出しからアテレコ（声の出演）まで「佐藤慶之助」の本名で多く出ていたが、この『人間の条件』からは「之助」を取り、「佐藤慶」を芸名とした。その意気込みがうかがえる。完成した映画はナホ夫人と映画館で観た。スクリーンに自分の名前が出た時は、ナホ夫人とともに喜んだという。少し照れくさくもあった。以後、小林正樹監督作品や大島渚監督作品で徐々に頭角を現してくる慶さんだが、誰もが知る映画俳優となるにはまだ少し時間がかかる。

映画館はワイドスクリーンの時代だ。そこに映し出された自分自身の姿を見て、慶さんは感激したのと同じに、こんなに痩せていては普通の役は来ないのではないかと思った。どうにかして太らねばという思いだった。俳優仲間の南原宏治が、ある特別なお灸療法を薦めてくれた。毎日、お臍（へそ）の上にたっぷりの艾（わい）を置き一時間近くのお灸。腸の働きを活性化させる効果があった。通院しているうちにモリモリと食欲が出て、通

妻と引き裂かれ召集令状により中国大陸に送られた主人公が、現地満州の関東軍で出会う兵隊たちの一人だ。軍隊に同化することができず、不合理な命令には従わない主人公の梶（仲代）は、凄惨なリンチを受ける。佐藤慶扮するインテリの一等兵・新城は、それを冷やかに眺めていたが、ある日、彼は軍隊からの脱走を試みる。

慶さんがこの映画に出演したのは、三十一歳の時だった。俳優養成所を卒業して数年、小沢昭一らの劇団新人会に属していた。当時はさまざまな映画のオーディションを受けたが、この時も「初めからあきらめていた」という。湿性肋膜炎を患い病み上がりの身体

い始めてから半年後には七十三キロにまで体重が増えたのだから有り難かった。その後、再び『切腹』という作品で慶さんをキャスティングした小林正樹監督は、まるまると太った慶さんの身体を見て「女の尻みみたいになって」とからかった。

やがて、それまで食えなかったのがウソのように、仕事が舞い込むようになっていく。インテリ脱走兵でのデビューだったように、いわゆる悪役の顔とは違うタイプの慶さんだが、その後は悪役が多い。人気の二枚目映画スターを主役に、新劇出身の役者を敵役、悪役に回すというのは、当時の映画界の慣わしだった。それが、慶さんを悪役として売り出すことにもなる。大島渚や新藤兼人らの監督作品では、その鬱憤を晴らすように癖のある個性的な役柄が次々に与えられていった。

「食えない時代」を支えたガリ版

俳優として食えない時代をもっぱら支えたのは、三歳年上のナホ夫人と、「もうひとつの伴侶」のガリ版であった。筆耕（ひつこう）のアルバイトは、郷里の会津若松の市